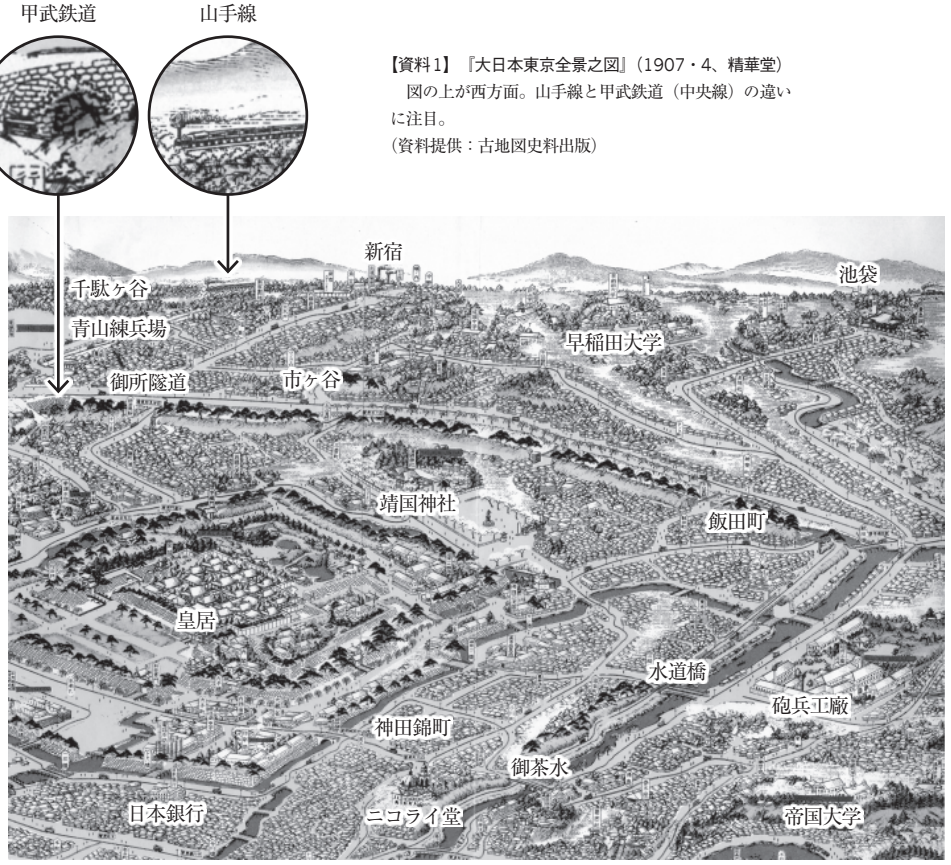
3　通勤・通学―未曽有の体験

住居を郊外に構えるということは、職場や学校まで短時間で移動できることが前提です。明治末の東京では、路面電車網が著しく発達しました。郊外の住人は、電車の時間に合わせて慌しく食事や身支度をし、同じ時間の満員電車で目的地へと向かうことになります。

このようなライフスタイルは、明治末という時代まで、人々が考えたことすらないものでした。観察を本分とする文学者が真っ先に小説に取り上げるのは、まさにこうした新しい時代の変化です。新興住宅地にたまたま隣り合わせになった住人同士や、電車通勤・通学中の客同士の人間関係（？）などは、近代になって人々が初めて触れることになった極めて不自然な体験でした（▷P13課題1）。

田山花袋は当時、代々木に住んでいました。彼は、たとえ獣のように醜くとも、ありのままの人間の姿を描くことが文学者の使命だと考えた自然主義の作家で、特に自己の体験を題材にした「私小説」で名のある人物です。しかし、繰り返して言えば、小説とは虚構に他なりません。ここでは、杉田古城の家と職場がなぜ千駄ヶ谷と錦町三丁目なのか。なぜ甲武鉄道と路面電車の通勤客なのか。これらの設定の必然性を考えてみることにしましょう。当時の山手線（汽車）と甲武鉄道（電車）とでは車内環境に大きな違いがあり、杉田が山手線の乗客では、この小説自体が成り立たなかったはずです。「見られずに見る」窃視を可能にしたのが「電車」だとすれば、この小説が描く〝少女病〟はまさに都会の病なのです（▷P13課題2）。



【資料1】『大日本東京全景之図』（1907・4、精華堂）
図の上が西方面。山手線と甲武鉄道（中央線）の違いに注目。
（資料提供：古地図史料出版）

4　女学生集団の誕生

一八九九（明三二）年の高等女学校令によって増加の一途をたどった女学生は、社会の新勢力として世間の注目を集めます。『読売新聞』は小杉天外の「魔風恋風」（一九〇三）や小栗風葉の「青春」（〇五）など、女学生をテーマとする連載小説で読者の人気を集めました。しかし、両作のヒロインとも、恋愛で人生につまずき悲劇の末路をたどります。「女学生」は「堕落」とセットで語られる格好のゴシップ種になったのです。経済的な自立がほぼ不可能な時代に、結婚を先延ばしして学歴を身に付けた女性たちは、既存の家制度の枠に収まらない異端者として、羨望と嫉視の好奇的な視線にさらされました。

ここで杉田の感性や観察が、かなりステレオタイプであることに注意しましょう。ヘアピンは日本髪でなく束髪（洋髪）に結ったハイカラ女性の象徴だからこそ、拾った彼は有頂天になるのです。彼が着目する海老茶袴やリボンなども、当時の女学生たちの必須アイテムでした。杉田の「少女病」は個人の異常性癖というよりも、当時の社会情勢と密接に関連していた側面があります（▷P14課題3）。

田山花袋（一八七二～一九三〇）　群馬県生まれ。本名、録弥。最初、尾崎紅葉に入門するが、モーパッサンの影響を受けて自然主義に転じた。人間の醜悪面を赤裸々に描くことを目的に、女弟子への愛とエゴイズムを描いた告白小説「蒲団」（〇七）を発表し話題を取る。その他、「生」「妻」（〇八）、「田舎教師」（〇九）、「縁」（一〇）などの長編小説がある。

【資料2】　小杉天外『魔風恋風』前編口絵（1903・11、春陽堂）
『魔風恋風』の冒頭、ヒロイン萩原初野の登場シーンは、「リボン」「海老茶袴」「自転車」というハイカラな（そしてしばしば「軽薄」と揶揄される）女学生のイメージ形成に多大な影響力があった（右図）。同様の姿で撮影した若い女性の写真が当時大流行した（左図）。